中部空港で風力発電実験

非常時の電源など模索

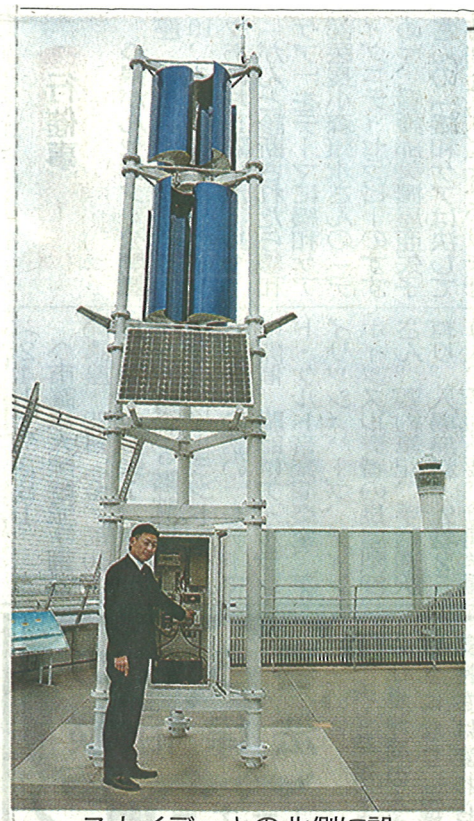
常滑市の中部国際空港で、風力発電機を使った実証実験が始まった。スカイデッキに発電機を三月末まで置き、停電などの非常時に携帯端末や情報表示装置の安定した電源となるかを探る。

発電機は、ベンチャー企業「エコ・テクノロジー」（名古屋市千種区）が開発した。微風や強風でも能力を発揮し、高速道路のサービスエリアなどに設置されている。今回の実験は、環境商品を扱う「木曽興業」（名古屋市中区）が中心となり、県の補助金を受けて取り組む。

設置した発電機は、独特の形状をした風車が上下で逆方向に回転する仕組み。太陽光パネルも備え、高さ六㍍で最大出力は三百㍗。本体に付いた発光ダイオード（ＬＥＤ）が夜間に点灯するほか、コンセントから電源も得られる。

五日から、旅客ターミナルビル内に情報提供用の電子看板八台の設置を始めた。運用に必要な電力などを調べ、停電時に発電機を使って適切な表示ができるシステムを検討する。

中部空港内に風力発電機を置くのは初めてで、空港会社の担当者は「会社として自然エネルギーを推進しており、実用化への第一歩にしたい」と期待している。（福本雅則）



スカイデッキの北側に設置された風力発電機＝常滑市の中部国際空港で

中日新聞（県内版）　H25.2.6掲載